

第八十五回六甲会（令和八年四月三日）

稲畑廣太郎選

兼題「桜薬降る・壺焼」その他当季雑詠

第一句会入選句

虚子館へ桜薬降る川に沿ひ

松村咲子

壺焼のまとふ海の香海の色

北上美佐子

壺焼や父の漁継ぐ十五歳

大西美知子

壺焼や海の男はシェフとなり

西脇英恵

ひと捻りして壺焼のしつぽまで

谷本房子

桜薬降る一本と思へざる

伴 明子

○雨に色足し桜薬降りやまず

田邊育子

桜薬踏む厚底のスニーカー

石角節子

壺焼や棘の先まで熱々に

長安悦子

掃き寄する帚目桜薬降りぬ

足立朱麻

堀高き獄舎に桜薬降りぬ

大西美知子

食堂に壺焼の香や給料日

蔭山夢宙

素潜りの上手な兄と壺焼を

谷本房子

壺焼の置きなほしても傾きぬ

伴 明子

壺焼の肝までするり抜けにけり

長安悦子

桜薬降り城苑に朝来る

藤田敦雄

蔵王堂四隅の桜薬降りぬ

芳林淳子

○桜薬降るや飛び交ふ親子猿

西脇英恵

抱き合ふ二人に桜薬降りぬ

森岡喜恵子

壺焼の殻に磯の香波の音

奥田好子

水の星桜薬降りルージュ色

武本満子

棧橋に壺焼の香の押し寄せて

伴 明子

壺焼やしつぽ集まる祖父の皿

森岡喜恵子

壺焼の香に乗る売り子浜言葉

中島庸子

力車ゆく桜薬降る古都軽し

一坪信舟

艶やかや桜薬降る雨の城

西脇英恵

○鎮もれる桜薬降る吉野山

武本満子

○一滴の醤油にくるり焼栄螺

松村咲子

大いなる海を凝縮焼さざえ

岡本やすし

○花びらは流るる桜しべは降る

三好ようこ

階へ桜薬降る結願寺

藤田敦雄

磯の香の焦げゆく波止の焼さざえ

奥田好子

壺焼や煮立ち磯の香立ち上がる

室田妙子

壺焼や夫は手酌の備前焼

武本満子

島の子は海が遊び場焼栄螺

森岡喜恵子

海士小屋の昼餉とれとれ焼さざえ

伴 明子

桜薬降る半地下の窓に罅

足立朱麻

鯉跳ねて亀石の亀鳴きにけり

山村千恵子

○目も鼻も耳まで旨し焼栄螺

池本準一

桜しべ降る風の音山の音

北上美佐子

磯の香もふむ壺焼旅の小屋

田口ひさえ

潮の香の雫を垂らし焼さざえ

足立十古

壺焼のじくじくと汁あつつつ

足立十古

桜薬降るやしんしん夜の更くる

福島良枝

父恋の桜薬降る夜はことに

北上美佐子

潮の香の雫を垂らし焼さざえ

徳永由起子

壺焼や潮の名残り旅名残り

三好ようこ

壺焼の何につんつんしてゐたる

吉村玲子

子等去りて桜薬降るすべり台

武本満子

○壺焼や日本海の煮詰まりて

吉村玲子

嵐電の桜薬降る鉄路かな

石角節子

桜しべ降る泉岳寺悲話良話

田口ひさえ

壺焼や海の記憶の香を放つ

田邊育子

壺焼や小屋を揺るがせ乾杯す

徳永由起子

壺焼のお醤油垂らすタイミン

谷本房子

桜薬降るに赤みを帯びて生く

足立十古

○人出見ず桜薬ふる戸にもどる

足立十古

句会終へ桜薬降る駐車場

中島庸子

桜薬降れば屋台も店仕舞

辰巳昌彦

壺焼や潮の香に足す醬の香

森岡喜恵子

壺焼の一つに足りる昼の酒

徳岡美祢子

店先の壺焼の香に人寄り来

山田佳音

さくら薬降る風のなき夜の閑か

徳岡美祢子

壺焼を食べたくなつて涎かな

岡本やすし

桜薬降るキャンバスにパレットに

田邊育子

壺焼の味は浜風浜言葉

池本準一

桜薬降る鳥影を放ちては

吉村玲子

壺焼の匂ひ素通り許さざる

山田佳音

壺焼はまだまだ降らず芦屋句座

辰巳昌彦

喝采は桜薬降る日へ変はる

谷本房子

副業のやがて本業壺焼屋

足立十古

○壺焼を支へ男爵いもも焼け

田邊育子

壺焼や鼻こそばゆし目の痒し

北上美佐子

壺焼の匂ひに暖簾潜りけり

石角節子

友もでき桜薬降る通学路

河辺さち子

飛石に桜薬降る暮鐘かな

足立朱麻

○壺焼になるも承知の角をもち

惠島祥一朗

手を繋ぎ桜葉降る晩年を
松村咲子
桜葉降る鮪の金遠く
西脇英恵

◇ ◇
(廣太郎先生出句)

桜葉降る着天を袈裟懸けに
壺焼に漁村の活気戻りゆく
出汁噴いて壺焼の香の立ち上る
散り初めて復活祭を近付ける
人知れず桜葉降る獣道

第二句会入選句

壺焼の煮ゆぶつぷつと呟きて
生澤瑛子
金輪際口開けまいと焼栄螺
藤井啓子
壺焼のぐつぐつ潮の泡を吹く
奥山登志行
壺焼やあふれくる香に身をひたす
田中由子
閉されし茶屋に降り積み桜葉
小柴智子
籠盛りの薬味自由や壺焼屋
高野さち
壺焼やぐいと取り出し頬張りぬ
槌橋眞美
○火を点けてきゆつと泣くこゑ焼栄螺
高橋純子
壺焼の香の追ひかけて来る浜辺
辻田あづき
壺焼や姿恐ろし味うまし
高木雅恵
桜葉降る天帝の意のままに
田附光映
桜葉降るふるこが我が母校
田村恵津子
桜葉降り尽しては命果つ
高野さち
焼栄螺堪能といふ殻の嵩
前田容宏
壺焼をくるり魔法の爪楊枝
玉手のり子
醤油の香潮の香浜の壺焼屋
生澤瑛子
満開の名残降らせて桜葉
田中由子
地酒取り寄せて酌む夜の壺焼屋
本郷桂子
壺焼の頑固な蓋の二つ三つ
高橋純子
焼栄螺息を凝らして腸を抜き
河合美恵子
海賊のごとく壺焼食らひたる
藤井啓子
○桜葉降る満開のレクイエム
高木雅恵
桜葉降りしを踏めば沈む雨
田附光映
壺焼や人とは罪の深きもの
前田容宏
壺焼に決まる旅先島渡船
北井真有美
○桜葉降るロケットは月めざす
玉手のり子
友送り桜葉降る家路かな
北井真有美
桜葉降る成し終へし安堵かな
南波喜久子

廻し込む千枚通し焼栄螺
高橋純子
いつ来ても桜葉降る坂の町
田村恵津子
香ばしく醤油こがして焼栄螺
田附光映
○壺焼や一キロ先の客を呼ぶ
槌橋眞美
桜葉降るカンバスのまだ白く
生澤瑛子
桜葉降る逆光の君を恋ふ
玉手のり子
奥千本降るにまかせる桜葉
前田容宏
海神の幸の結晶壺焼に
奥山登志行
○桜葉降りて輪廻の声を聞く
高木雅恵
晩年の閑けさ桜葉降りぬ
小柴智子
桜葉降りて余韻の日を了ふ
杉山千恵子
潔く桜葉降り敷く径
本郷桂子
桜葉降り黒髪にまとひつく
高橋英士
一人来し桜葉降る深吉野へ
生澤瑛子
壺焼を目玉に荘の磯料理
奥山登志行
壺焼の湧き出づ泡の潮の香よ
南波喜久子
球拾ひ桜葉降る外野かな
田村恵津子
壺焼の底つつきみる箸の先
田中由子
くるりんと抜くこつのある焼栄螺
藤井啓子
壺焼や瀬戸の潮吹き出来上る
槌橋眞美
○口細くして壺焼の香をすす
玉手のり子
江ノ島に壺焼ねだる日のありて
高木雅恵
桜葉降る終章の風の色
本郷桂子
焼栄螺江の島の旅よみがへり
河合美恵子
○壺焼の命あるかに傾ぎけり
高野さち
風止みて桜葉降る間合ひあり
柄川武子
虚子館へ来るまで仰ぐ花の道
平田 恵
○吉野建桜葉降る昼餉かな
辻田あづき
○黒潮の轟を聞く壺焼に
奥山登志行
○桜葉降りし阪急電車着く
高橋純子
桜葉降る雨音を染め変へて
玉手のり子
潮風にさまし壺焼味はひぬ
柄川武子
途中下車して桜葉降る墓へ
平田 恵
ツカジエン又桜葉降る楽屋入り
細田清子
桜葉降る片恋の終りたる
藤井啓子
桜葉降り瓦屋根へばりつく
高橋英士
桜葉肩にはらりと降る忌日
小柴智子
壺焼を食ふ源平の海を見て
生澤瑛子
桜葉降る目の中へ入りさう
南波喜久子
氏神へ桜葉降る石畳
北井真有美

◇ ◇

(廣太郎先生出句)

桜葉降る哀れ聖金曜日

壺焼の噴いてジュラ紀の記憶かな

桜葉降る遠山を潤ませて

壺焼の出汁に拘る主かな

恋破れ桜葉降る闇に消ゆ

◎次回第86回六甲会は令和8年6月5日(金)開催です。

兼題 山椒魚・若竹